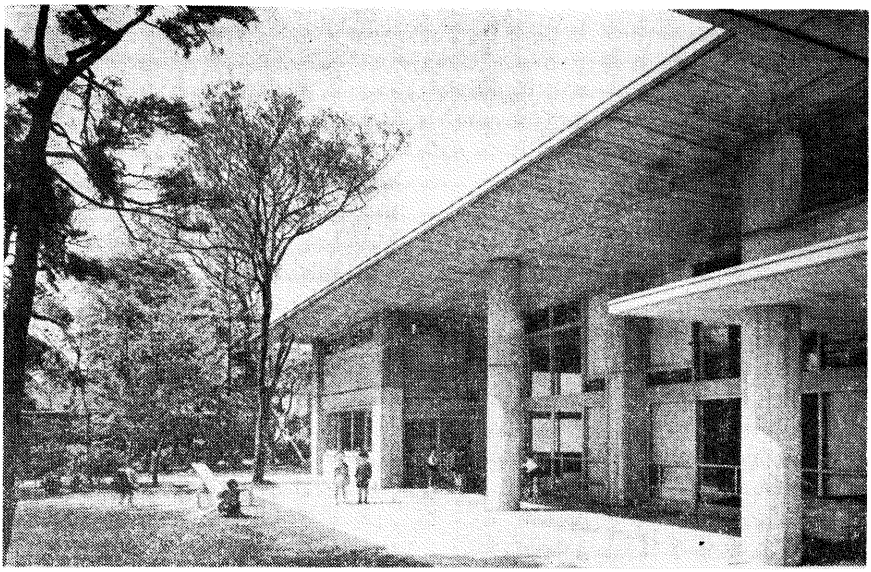


東洋英和幼稚園設計メモ

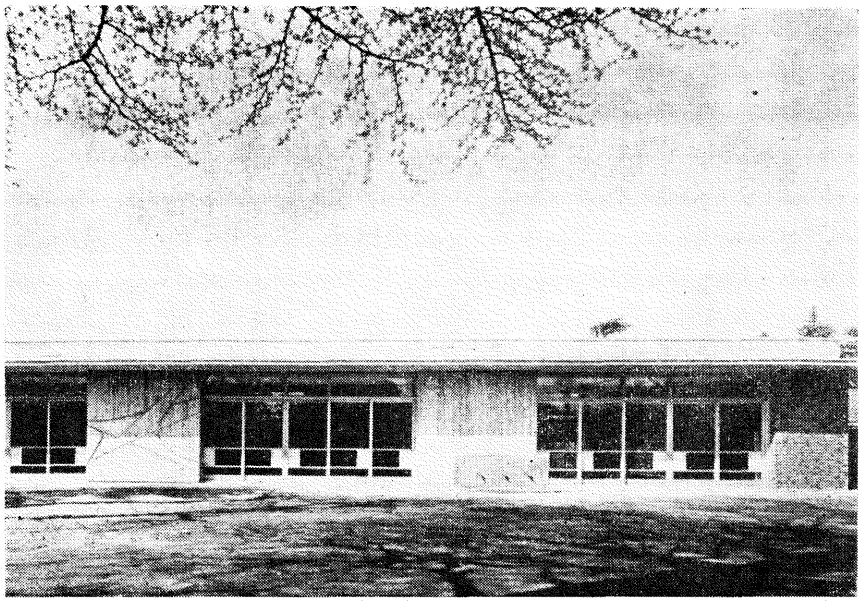
松ノ井覚治

一九六一年の春に私共は東洋英和幼稚園園舎の設計に取りかかり、一九六二年の春その工事の完成を見るに到った。幸いにして、私共はこの園舎の設計を始める直前に青山学院幼稚園の設計を終え、工事もほぼ完成に近くなっていたので、その経験を充分に生かしたいと思い慎重に設計にあたった。

私は子どもたちに親しまれ、愛される園舎、子どもたちの心（こころ）と身（からだ）が豊かに健やかに養われるに最もふさわしい環境、そして幼い時代の楽しく意義ある生活の場を建設することを夢見つつ完成に向かって努力した。

良い建物を作るには、関係者全部の善意と相互の信頼に基づいた思考、討議が必須の条件であると思う。英和幼稚園の建設に当って、この重要な条件が備えられたことは、真に幸せなことであったと感謝している。先生方との設計に関する打ち合わせは、終始主観的意識によらずに大局的で建設的な判断によってなされた。また幼児教育の方針、内容及び課程など基本的な問題を中心に検討された意見が数多く出されて、それを取り上げつつ青写真が作製されていった。

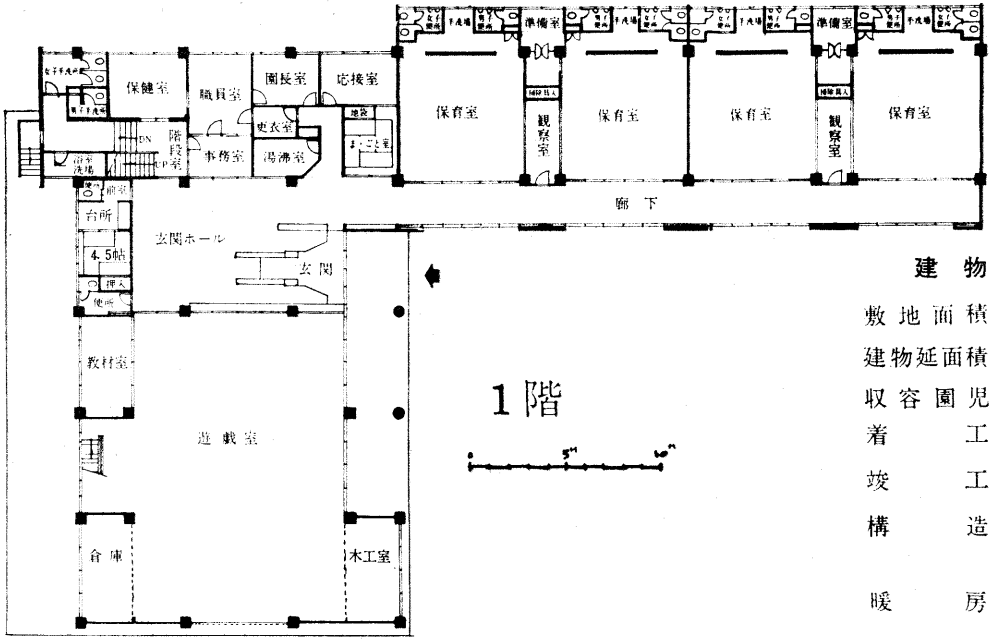
計画の概略を述べると、総面積約一一四九平方米（約三四五坪）のこの園舎は小学部の校舎に隣接した敷地内に南と東に面するように四つの保育室及び一つの遊戯室が庭を抱いてL字型に配置されている。主体構造は鉄筋コンクリート造り、平家建、一部分中二階及び二階建となっている。



先ず最初に先生方から提出された大きな問題はいかにすれば鉄筋コンクリート造りと言うごつい冷たい建物が子どもたちに心理的な圧迫感を与えないようにできるかということであった。この問題の解決は子どもたちが毎日生活している木造住宅の感覚を取り入れ、木部を多く使用することによって、コンクリートの冷たさ、ごつさを緩和し、暖かくしかも家庭的な性格をもち子どもに親近感を与える建物を造ることであった。

次に、先生方から出された希望を並べて見よう。第一に、この施設がとくに短大保育科の実習にもしばしば使用される為にそれに必要な設備をも備えて欲しいとゆうこと。第二に、寸法・色彩及び使用材料の選定に当っては、子どもたちに常に親しまれ、使いやすく、しかも危険でないようにとゆうこと。第三に管理上、保健衛生上の配慮が充分になされて欲しいこと。などである。以上の希望をできるだけ実現するように努力した。

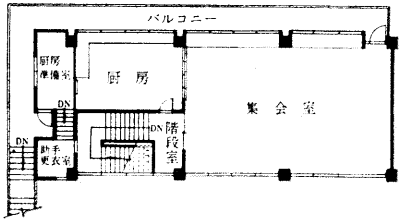
園舎の実施計画を説明すると、先ず配置計画において玄関の位置は非常に重要な要素を持っている。この英和幼稚園の玄関の位置は便利さとか動線の問題とかよりも、むしろ園児の心理的配慮を重視して決定された。即ち、お庭から御縁へといつも遊びに行くお友だちの家のように、子どもたちが建物に対して何らの圧迫も感ぜずにアプローチできるよう、殊更に正門に通じる広場に面して取らずに、L字型の奥まった個所に配置することにした。



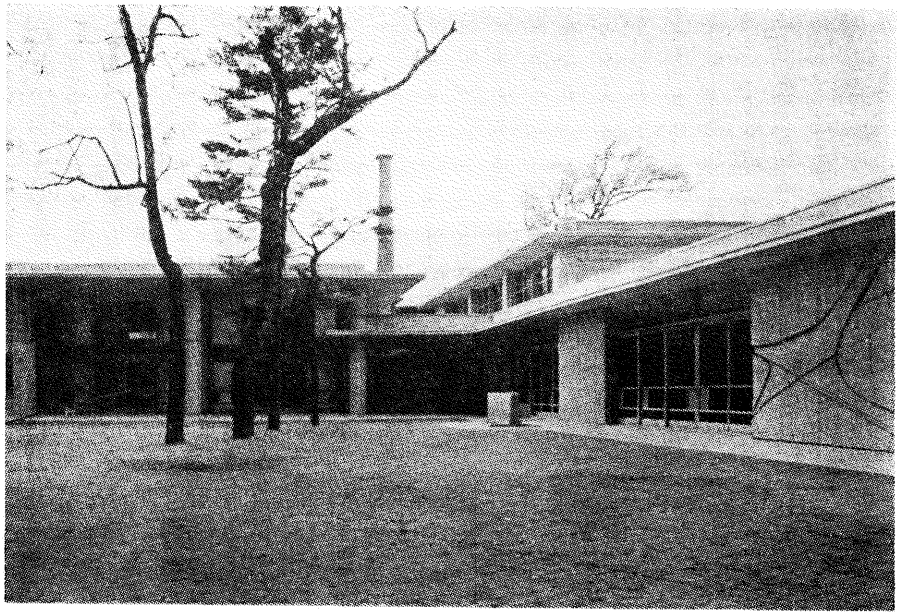
1階

建物概要

敷地面積	2,348 m²
建物延面積	926.4m²
収容園児	90名
着工	1961. 7. 26
竣工	1962. 2. 10
構造	鉄筋コンクリート造2階建 (将来3階まで増築可能)
暖房	温水暖房



2階



一階には四つの保育室、二つの観察室、ままごと室、遊戯室（木工室・教材室・器具倉庫を含む）、管理部分（院長室・職員室・事務室・保健室・応接室・湯沸場・管理人室など）、及び玄関ホール、二階には集会室兼給食室及び厨房がおかれている。

保育室について

平面計画上とくに記しておきたいことは先ず各保育室の背面に男女別便所、手洗い場及び準備室などが配置され、前面には各保育室を結ぶ廊下がある。このようなタイプをとる場合には採光をいかなる方法によるか、我が国の気候上保育室の通風換気を背面の何れの部分にとるかとゆうことが問題になる。採光の点では、この英和幼稚園においては各保育室への直接の採光をアクリライトドームのトップライトを使用することにより解決されている。このタイプの配置を用いる場合に有効採光面積において通常数字的な不足が生じがちなのでトップライトを用いることは合理的な解決方法であると思う。なぜならば建築基準法によると、トップライトによる採光面積は他の方法による採光面積の三倍の面積として見做されるからである。通風の点では、背部の中央にスクリーンタイプの間仕切りを設け、その両側より手洗い場上部の窓を通して通風を計った。その他に気付いた点は、室内での展示用壁面をできるだけ多く獲得する為に、一部の棚の戸を回転式にして両面を展示用ボードにするなど工夫したがもっと多く壁面が必要なのではないかと思っている。また

子どもたちのロッカーには仕切りや戸などが無く、ただ、フックを取り付けてあるのみだが、仕切りや戸をつけた私共の設計によるある幼稚園では帰り仕度の時、子どもたちが一所に集まり混雑したりふざけたりして危険なこともあると聞いている。

観察室について。この室は二つの保育室の間に置かれ、マジックミラーを通じて園児たちに気付かれずにその行動状態を母親たちや短大保育科の学生が観察し、また隠しマイクによって観察室内でテープ記録までできるようになっている。

遊戯室について

これは保育本来の目的の為に使用されることはもちろんのこと母親たちの集りや、時には短大の学生にも開放されるなどかなり多目的に使用されるので、できる限り空間を利用して中二階をとり、収納スペースを多くとって、遊具、教材、椅子などが適当に整理できるようにした。

玄関ホールについて

ある時、建築科の学生の見学会があり私が説明しながらこの幼稚園を案内した際、一人の学生が「このような平面計画では、玄関ホールの部分で動線的に混乱がありその解決が積極的になされていないのではないか」とゆう質問があった。私は常々動線について単に明解に処理されていることのみでなく、その動線の時間的物理的分析も明解にされていることが大切であると思っている。現にこの園

舎の場合、玄関ホールにおいてもその点は充分に考慮されて、問題はないと思っている。ちょっと話がそれるが、時折り動線という専門的なことばに一般の方々が迷って、本質的なものを追求し難くなる場合があるので、ここに触れておいた。

次に寸法、色彩及び使用材料の選定に関しては、幼稚園の先生方の御協力を得て前に述べた如く、子どもたちに親しまれ、使い易くしかも危険でなく、衛生的なものをと特に研究し注意を配った。例えば、色彩計画においては、各室の使用材料の現物見本を貼った一覧表を作製し、先生方と共に充分に検討して決定した。

外観について

コンクリート造りという強い感じを柔げる為に、例えば庇のディテールなどもできるだけ重厚でなく軽く纏め上げるようにし、外壁の仕上げにも木部や焼過練瓦を多く使用し、建具も総て木製とした。またガラス戸の下部にはアクリライトプレイトをはめ込み色彩を豊かにするよう努めた。保育棟の三か所のコンクリート打ち放しの壁面の一つには、彫刻家桑原臣守氏の御協力によるレリーフが試みられているが、これは型枠を用いて作られたものである。私は同じような壁面が三か所並ぶのでその単調さに何となく物足りなく、淋しく、冷たくさえ感じられたのでその一つには何らかの工夫を是非したいと思いレリーフを用いることを先生方に提案した。すると造型が具象的な物でなく、さまざまなことを考え、想像できるような抽象的なものであればよろしいということに意見が纏まり、数種類の模型を彫刻家に提出していただき、その中から選定されたものが現在のレリーフである。幼稚園を巣立った人々が将来何時かここを訪れてこの建物を、またこのレリーフを見た時に、幼き日の楽しい思い出を甦えらせることができればと願っている。

暖房方式について説明をすると、四つの保育室と遊戯室はユニットヒーターによる温風暖房とし、その他の部分にはベースボードヒーターによる直接暖房を採用した。ユニットヒーターの消毒にはかなり悩まされた。私は幼稚園では園児が転び戯れる部屋の床面の為に理想的な暖房方式は床下に温水パイプを配管しその輻射熱による床暖房（パネルヒーティング）ではないかと考えている。青山学院幼稚園においては、この床暖房方式を用いて喜ばれている。

以上東洋英和幼稚園の設計がいかにして、また主にいかなる点に注意がはらわれて進められたかを述べ、また気になる点などもありのままに記した。これから園舎の建築を計画される方々が建築家の技術的裏付けのある構想に対してどのような方法で協力すれば優れた特徴のある施設を完成することができるか、その御参考になれば幸いと思う。なお次回には内部設備に関する詳細図面を用いて、もっと具体的に、広さ、高さ、長さ、仕上げなどについて説明したいと思っている。

（松ノ井建築設計事務所所長）

〔写真は「新建築」一九六四年三十七巻六号より。撮影　関四郎氏〕